

すべては、わずか2組のアライグマから始まった。1934年、北ドイツでアライグマが野に放置された。そして、第2次大戦中、ベルリン近くのアライグマ農場に爆弾が当たり、多くのアライグマが逃走したという。それからというもの、ドイツでアライグマは増え続け、都市にも住みつき、家庭にまで現れる。アライグマ君たちはネコ

のために備え付けられた出入り口を利用して住宅に忍び込み、ドアや冷蔵庫まで開けてしまう。人間を恐れることもなく、屋根裏部屋や地下室に住みついてしまうこともあるという。まるで「不法居住者」のごとく。

ある人は1年間で40匹のアライグマ君をしとめたが、同じような顔をした動物が次から次へと現れる。夜行性なので人間さまが白川夜船のうちに、のそのそ現れてはゴミ箱を荒してゆく。毎晩待ち伏せてやっつけるのでは、身体がいくつあつてもたまらない。その数は、おそらく数千匹になっ

ておそろく数千匹になっ

にエサをあげていた人を見て、内心、「早く撃ち殺してしまわなければ、増え続けて人を襲うかもしれない」と、犬猫に関してはしごく甘いくせに、カラスについては「超々カラス」と化してしまう自分

にエサをあげていた人を見て、内心、「早く撃ち殺してしまわなければ、増え続けて人を襲うかもしれない」と、犬猫に関してはしごく甘いくせに、カラスについては「超々カラス」と化してしまう自分

で市役所の担当者に聞いたところ、市内にはハトが4万羽に増えてしまっただという。中には1人暮らしの高齢者でハトに毎日エサをあげてを生きがいでいる人もいそうだが、ハトは年に平均5回も産卵し、年になくとも12羽のヒナを育てる。1羽が年間約12ポンドのフンを出すので、ドイツの主要都市では毎年400ポンドのフンを処理するため、多額の税金が払われるのである。ハトと

お騒がせ、アライグマ現れる

わいから殺すのは可愛そう」という動物愛護派と、「害獣は根絶しなければならぬ」というタカ派に分かれてしまう。このあたりがむずかしいところで、以前、私は実家のある三鷹市でカラス

分に気が付いた。ドイツでは都市部でハトが繁殖しすぎたため、ミュンヘンでは「ハトにエサをあげる人には罰金」という条例が数年前にできた。以前、寄稿していた動物雑誌の取材

で市役所の担当者に聞いたところ、市内にはハトが4万羽に増えてしまっただという。中には1人暮らしの高齢者でハトに毎日エサをあげてを生きがいでいる人もいそうだが、ハトは年に平均5回も産卵し、年になくとも12羽のヒナを育てる。1羽が年間約12ポンドのフンを出すので、ドイツの主要都市では毎年400ポンドのフンを処理するため、多額の税金が払われるのである。ハトと

いってもあなどれませんで入んでいることでしょう。

（福田直子・ミュンヘン在住、イラスト・熊谷徹）

